

シンポジウム

思春期・青年期のメンタルヘルス ～精神疾患の早期支援を目指して～

を開催しました。

平成 22 年 2 月 27 日(土)に三鷹産業プラザにてシンポジウムを開催いたしました。当日は、福祉関係者や教育機関、行政の方々やご家族など、161名もの方が参加されました。

プログラム

行政報告...寺谷 俊康氏	(厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課課長補佐)
基調講演...加賀 乙彦氏	(作家・精神科医)
実践報告...濱口 達也氏	(三重県立こころの医療センター ユースメンタルサポートセンターMIE)
石倉 習子氏	(東京都立松沢病院 ユースメンタルサポートセンター松沢)
田尾 有樹子	(社会福祉法人 巢立ち会 ユースメンタルサポート Color)
パネルディスカッション	
司会 : 長汐 道枝氏	(府中市教育委員会 スクールソーシャルワーカー)

精神疾患を罹患した人々の予後は、発症後 2~5 年以内(この期間を「臨界期」と呼びます)における治療・支援に左右されると言われています。私たちが日頃支援している方々も、話を聞くと青年期やそれ以前から精神疾患の兆候がみられていたのではないかとの方々も多くいます。今回のテーマである「早期発見・早期支援」は罹患後の生活の質の向上や、将来の障害を軽減するために重要な支援なのです。

行政報告では、発症後の流れの説明と共に、早期発見・支援を進めるために何が必要か、現在日本はどういった取り組みをしているかを話していただきました。精神疾患は若年の世代にとってもっとも重大な健康上の課題であり、社会的な問題でもあります。次世代を担う若年層が精神疾患を罹患しやすく、その予後が芳しくな



(寺谷氏)

いとすれば、日本社会に大きな影響を及ぼすでしょう。臨界期の対応として、症状の治療だけでなく、日常・社会生活、家族支援を包括的に行なっていく必要があります。そのためには医療・福祉・行政・教育機関など、青年を取り巻く様々な機関が連携しあうこと、それを推進していくことが必要でしょう。会場から“精神科への敷居は高い”との声が聞かれ、関係機関や一般の人々への啓発活動がまだまだ不十分であるとともに、支援体制の整備の必要性が感じられました。

また、加賀氏の基調講演でも思春期の多感性や精神的疾患の罹りやすさについての話がありました。思春期にライフイベントが重なり、かつ共働き家庭が多い日本では、精神疾患にかかりやすく発見し難い環境にあるといえます。早期発見



(加賀氏)

ために、医者でも、心理職でもない中間職の支援者を増やすことが必要だと氏は述べていました。

実践報告を行った3団体はその中間職を役割であるといえるでしょう。

ユース・メンタルサポートセンターMIE、松沢、Colorはいずれも学校、医療、地域との連携を図り、早期発見・支援を目指して活動しています。従来の精神障害者の支援と異なり、支援対象が現れるのを待つのでなく、支援者から出向いて行くアウトリーチが中心となります。

そのため各方面への広報・啓発活動も重要な活動の一つとなってきます。また、医療への仲介だけでなく、本人の目標や希望に沿って環境調整や家族支援、様々な支援をコーディネートすることは、寺谷氏の言う包括的な支援であるといえます。医療機関を母体とするMIE、松沢には、医療・生活の両面からの行き届いた支援が期待されます。また、Colorは地域の中で活動しているため、地域からの相談窓口の役割が期待できるでしょう。

日本の早期支援はまだ始まったばかりではないでしょうか。教育現場との連携の難しさ、精神疾患への偏見、相談窓口・支援者の少なさなど課題は多いといえます。しかし、どの現場でも思春期の精神的問題が取り上げられる今、支援体制の整備や支援者への教育は急務であり、現場の努力だけでなく、国をあげて取り組んでいくことが必要だと思います。

しかし課題だけではありません。今回のシンポジウムで3団体が発表したように、確実に早期発見・支援は進められていこうとしています。ますますの発展と活躍、普及が期待されシンポジウムとなりました。

最後になりましたが、講演者の方々、参加者の皆さま、長時間のシンポジウムにお付き合いいただき誠にありがとうございました。

(遠藤)



(濱口氏)



(石倉氏)



(田尾氏)

